

新生児行動・育児環境とその後の発達経過

川崎千里、穂山富太郎(長崎大学医療短大)

川口幸義、山口和正(長崎県立整肢療育園)

後藤ヨシ子(長崎大学教育学部)

〔はじめに〕

私達の研究では、長崎県の五島列島において、新生児行動とその後の発達および育児環境を、前方視的に調査している。その目的は第一に、日本人の子供が、アメリカなどで既に報告されている新生児行動と比較して、日本人特有のパターンを持っているかどうかをみることである。目的の第二は、児の行動・能力と育児環境がその後の発達におよぼす影響を、新生児期から縦断的に観察することである。昨年度は、新生児期について報告したが、今年度は、生後6か月までについて報告する。

〔対象〕

前年度から引き続き観察している健康成熟児21名である。五島列島は長崎市から船で3時間以上かかる離島で、生活一般や育児に古い習慣が残っている。そのため、この地域の子供は、日本固有の子供の特徴を、都市の子供より持っているのではないかと考え、調査地域に選んでいる。

〔方法〕

出生当日を0として、BrazeltonによるNeonatal Behavioral Assessment Scale(以下NBAS)を、日令1・3・7・14・の計4回おこなった。評価者は主にBrazelton博士と、信頼性テストに合格した2名の計3名である。生後14日と6か月の計2回、家庭訪問をおこない、Bayleyの精神運動発達検査、育児環境調査、質問紙による児の気質調査などを、おこなった。

〔結果〕

生後3日のNBASでは、表1のように五島列島の児は、アメリカの児に比較して、繰り返し刺激に対する慣れ現象が起こりやすく、視聴覚刺激とくに視覚刺激への定位反応が良いように思われた。

日令1から14までの経過については、前回も一部報告したように、状態の調節能力や視聴覚刺激に対する反応は、むしろ低下しており、アメリカなどからの報告と異なっていた。五島の児の中には、低下傾向の群と上昇傾向の群があった。育児環境との関連をみるため、祖母が同居する三世代家族で、哺乳が1日10回以上と頻回であるか、あるいは訪問観察時に祖母の過度の世話がみられた児を、仮に伝統的保育群と名付けたところ、21名中7名いた。この群では、図1・2のように、視聴覚刺激に対する定位反応および状態調節能力が低下傾向を示していた。

母の受容的な態度や積極的な働きかけを、表2のように定義したところ、日令14での母の態度と児のNBASの間には明らかにつながりは認めなかった。

生後6か月では、21例中18例が島内に、3例が島外(長崎市1、福岡県2)に生活していた。3名はいずれも里帰り出産であった。21例のBayley Motor DQは 101.0 ± 4.9 で、Mental DQは 99.3 ± 9.5 であった。新生児期の伝統的育児群は、生後6か月ではMental DQ 102.0 ± 3.8 、Mental DQ 104.9 ± 11.2 と、発達の遅れはみられなかった。生後6か月の育児環境については、母の積極的な働きかけの少ない例が21例中6例、受容的でない例が2例にみられた。積極的な働きかけの

少ない群では多い群に比べて、Mental DQがやや低かったが、有意な差ではなかった。受容的でない母の児2名は、Mental DQがそれぞれ91と94で低いと思われた(表3)。

生後6か月の母親への質問紙による児の気質(行動様式)は、庄司らによって報告されている東京の児に比べ、反応の強さが低かった(表4)。

〔考察〕

新生児期の行動は、アメリカの結果に比較して、刺激に慣れやすく、出生直後の視聴覚定位反応が良い結果であった。

新生児早期の過度の世話は、児の状態調節能力や視聴覚刺激への定位反応を低下させているように思われた。このことは、育児環境が、日令7・14と、った早期の児の行動にも、影響を与えている可能性を示している。観察対象となった健康成熟児では、生後6か月の精神運動発達は正常範囲に入っており、新生児期の“落ちこみ”は一時的なものと思われた。しかし、視聴覚刺激の認知や、哺乳・睡眠リズムの確立に困難が予想されるHigh-Risk Baby Difficult Babyについては、刺激を単に多く与えるだけでなく、早期から外的な哺乳や世話のリズムをつくること、認知機能等の促進のためにも必要で

はないかと考えられる。

生後6か月時の行動様式質問では、東京の児に比べ、反応の強さが有意に低く、これは新生児期のNBASで、アメリカおよび加藤らによる東京の児と比較して、繰り返し刺激に対する慣れ現象がおこりやすかったことと、関連があるように思われた。このことはまた、新生児行動について、同じ日本人でも地域差があるかもしれない点を更に検討しなくてはならないことを示している。

〔まとめ〕

新生児期の行動は、アメリカの結果に比較して、刺激に慣れやすく、出生直後の視聴覚定位反応が良い結果であった。

新生児早期の過度の世話が、児の諸行動を低下させる現象がみられた。6か月後にはこの落ち込みはcatch upしていた。

生後6か月の精神発達は、母が受容的でない2名でやや遅れがみられた。新生児期のNBASとは、今回の検討では、関連は少なかった。

生後6か月の児の行動様式は、東京の児より反応の強さが低い値で新生児期の慣れ現象とともに、五島の児は“おとなしい”印象があった。

表1 日令1-14のNBAS

Cluster	Day 1	Day 3 (USA)	Day 7	Day 14
Habituation	7.14±0.78	7.27±1.20 (6.3)	7.26±0.97	7.40±0.90
Orientation	6.74±1.26	6.81±1.02 (6.0)	6.43±1.10	6.67±1.22
Motor	4.83±0.80	4.97±0.60 (5.3)	5.12±0.86	4.98±0.75
State regulation	5.89±1.10	5.41±0.96 (5.8)	5.37±1.01	5.29±1.06
State range	3.50±1.12	3.59±1.10 (3.9)	3.20±1.17	3.84±1.10
Autonomic Regulation	6.63±1.08	6.42±0.82 (5.6)	5.95±1.14	5.87±1.18
Reflexes	0.89±0.74	0.79±0.63 (1.6)	1.05±1.32	0.90±1.45

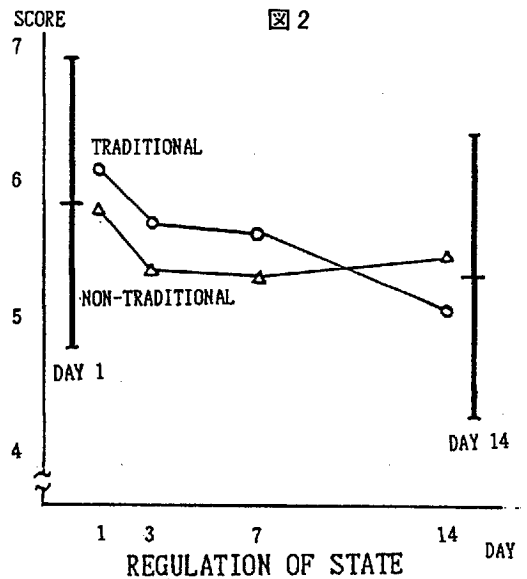
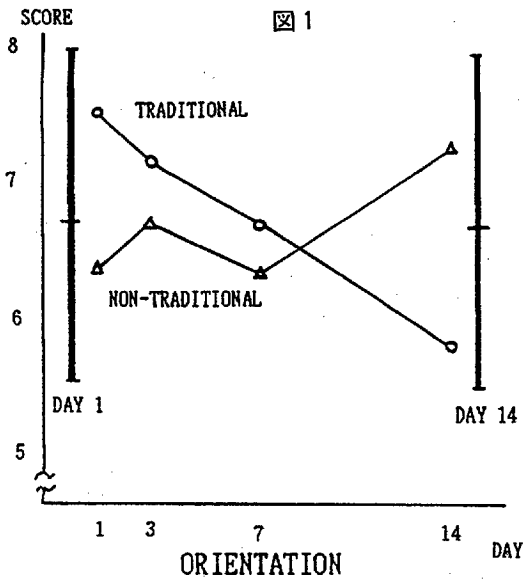


表2 育児行動の評価(訪問時の観察所見)

母の積極的な働きかけ (6/8以上)

1. 自発的に2回以上声をかける(吐責を除く)
2. 子供の発声に対して発声で答える
3. 1回以上愛撫する
4. 子供を視野におさめ、しばしばみつめる
5. おもちゃを与えたりあやしたりする
6. 仕事をしながら子供に声をかける
7. 母が子供の遊びの時間を作る
8. 母の目から見て子供の発達を促すおもちゃがある

母の受容的態度 (6/8以上)

1. 自発的に子供を2回以上ほめる
2. 子供について話すとき、声の質がポジティブである
3. 訪問者に子供を誉められると喜ぶ
4. 子供に大声を出さない
5. 子供に明らかな敵意や困惑を示さない
6. 子供の事を悪くいったり叱ったりしない
7. 児の行動を制限したり邪魔したりしない
8. 訪問中に母は児をぶったりしない

表3 生後6か月のBayley Test

	Mental DQ	Motor DQ
全体	99.3±9.5	101.0±4.9
母の積極的な働きかけが少ない	96.7±7.2	101.3±3.3
母が受容的でない	92.5±2.1	96.0±0

表4 気質：乳児行動様式質問紙

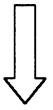
	五島 21例	東京 374例
Activity	4.34±0.53	4.59±0.55
Rhythmicity	2.95±0.70	2.89±0.58
Approach	2.84±0.56	2.81±0.73
Adaptability	2.89±0.57	2.67±0.60
Intensity	3.42±0.59*	3.72±0.63
Mood	3.47±0.63	3.51±0.59
Persistence	3.47±0.75	3.14±0.75
Distractability	2.59±0.55	2.51±0.60
Threshold	3.89±0.44	3.86±0.63

* P<0.05



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔はじめに〕

私達の研究では、長崎県の五島列島において、新生児行動とその後の発達および育児環境を、前方視的に調査している。その目的は第一に、日本人の子供が、アメリカなどで既に報告されている新生児行動と比較して、日本人特有のパターンを持っているかどうかをみることである。目的の第二は、児の行動・能力と育児環境がその後の発達におよぼす影響を、新生児期から縦断的に観察することである。昨年度は、新生児期について報告したが、今年度は、生後6か月までについて報告する。